



#38

**RUN! RUN! RUN!**

著: 藍澤たすく  
イラスト: かもめ遊羽

「ひっ、はっ、ひっ、ふう……!」

切れ切れの息のもと、室井慎司は激しく後悔していた。

自分はなぜ軽率にもあんな約束をしてしまったのかと……。

日頃の運動不足がたたって、わずか3kmのジョギングすら慎司には地獄の責め苦に感じられる。事実、すでに全身の筋肉が限界を訴えていた。

疲労困憊する慎司の脳裏に、2週間ほど前の学校での昼休みの情景が甦えつつ……。



「もうすぐ学校のマラソン大会だね、慎司くん♪」

幼なじみ兼クラスメイトの如月野々香が満面の笑みで慎司に話しかけてくる。

「……それがなんだっつーんだよ」

学食で買ったカレーパンをかじりながら、慎司はぶっきらぼうにそう応える。

「いやー、今年はついにビリになっちゃうんじゃないかって、あたし心配してあげてるんだよー?」

「ば、ばかにすんな! さすがにビリとかねーから! ありえねーから!」

「ちなみに去年は何位だったっけ?」

「……247位」

ちなみに我が四条高校に在籍してる2年生は全部で248名である。

「なんだったらあたしがコーチしてあげてもいいんだよ? ん?」

「いらねーよ!」

慎司は声を荒らげる。

四条高校女子陸上部のホープとして活躍している野々香は当然去年のマラソン大会も1位でゴールしている。その彼女がコーチになってくれれば、慎司といえどもかなり順位の上が見込めるはずだが、彼のちっぽけなプライドはそれを頑として許さなかった。

「俺がちよっと本気出せば、100位以内とかすぐだから! 余裕だから!」

それどころか、逆に精一杯の虚勢を張ってしまう。

「へー? ほー? ふーん? じゃあ、100位以内に入らなかつたらどうするの?」

「そんなときやお前の言うこと何でも聞いてやるよ!」

勢いで口が滑った。

だが虚勢を張った手前、引っ込めることができない。

「よーし! 判った! その約束忘れないでよ!」

「そ、その代わり俺が100位以内に入ったら、お前が俺の言うことを聞くんだからな!」

「はいはい、判ってます判ってます♪」

野々香はにこやかにそう応えたのだった。



「あーくそ！ もう限界だー！」

なんとかいつものジョギングコースを走り終わった慎司は、そのまま夕方の公園のベンチの上に仰向けになってしまふ。

体中がばらばらになりそうでもう一歩も動けない。心臓が飛び出してきそうな鼓動音が頭までがんに響いてくる。

……現役高校生としてあるまじき体力のなさだった。

「それぐらいでへばるなんて情けないわね〜」

「野々香!？」

いきなり頭上に現れた幼なじみ兼クラスメイトの顔に慎司は驚いた。

「な、なんでお前がここに!？」

「べ、別にあんたを心配して来たわけじゃないんだから！ た、たまたまジョギングコースが一緒だっただけなんだから！」

「は？ 何言ってるの、お前？」

何故か赤面して早口で喋る野々香を慎司は訝しげに見つめた。

「それより、ほら！ 早く立つ！」

「お、おう……」

慎司は野々香に手をとられ、強引に起き上がらされる。

「大体あんたはフォームがなってないの！ だから必要以上に体に負担がかかるし、疲労も増すのよ！」

「そ、そうなのか？」

言うが早いか、野々香は慎司の肩を両手で掴んだ。

瞬間、間近にいる野々香からほんのり甘い香りがした。

「ちょ!?! お、おまえ何してんだよ！」

「いい？ まず正中線を意識して体の軸がぶれないようにするの。そして足を踏み出すときは、土踏まずの後ろくらいから親指と小指の間に膝がくるような形で体重を乗せて……そうそう、その調子」

「……………」

さらに体を密着させてくる野々香。その柔らかな感触に、慎司は正直どぎまぎしていた。

「ほら、気を散らさない！ ちゃんと集中して！」

「……無茶言うなよ！」

「何が無茶なのよ？」  
 「いや、なんでもない！ なんでもないって！」  
 その後もあたふたする慎司を押さえ込む形で、野々香のフォーム指導は続いたのだった。



「ほんとだ……」

野々香の言う通りのフォームで走り出した慎司は新鮮な驚きを感じた。  
 特別に力を入れているわけでもないのに、先ほどとは段違いのスピードが出る。  
 体が軽い。

まるで生まれ変わったような気分だ。

ちよつとフォームを変えただけで、こんなにも劇的に走りやすくなるなんて……。

「すっげーな、野々香！ 超気持ちいいぜー！」

「あつ、バカ！ 調子に乗ってそんなスピード出したら……」

「うわっ!？」

野々香が言い終わらないうちに、慎司はこけた。石につまづいて盛大にこけた。

「ててて……」

「ほらー、だから言ったじゃない!？」

眉根を寄せて野々香が近づいてくる。

「だってよく、ちよつと速く走れるようになったから嬉しくってよく……」

「あー、もう、血が出てる！ ほら、足出して!？」

言うが早いか、野々香は慎司の擦りむいた膝小僧に向かって、腰につけたポーチから出した  
 消毒スプレーを噴きかけた。

「お前、いつもそんなもん持ってるの?」

慎司が感心した表情で野々香を見つめる。

「競技中はいつ怪我するかわかんないから、最低限はね。……ん、これでよし」と

慎司の膝小僧に大きな絆創膏を貼った野々香は満足そうに頷いた。  
 その刹那。

「儂を喚び出したのはお前か……」

腹の底に響くような低音の声がした。

「えっ……」

声のした方を振り向いて二人は絶句した。

そこに見たこともないような巨大な怪物がいたからだ。

全長は5メートルもあるだろうか？ 頭は牛のようにも見えるが、体はまるでキングコングのような分厚い筋肉に覆われている。しかもよく見ればその体毛1本1本は青い蛇で構成されており、不気味に蠢いていた。

赤黒い瞳孔は不規則に収縮を繰り返し、耳まで割れた口からはだらだらと涎がこぼれていた。研ぎ澄まされた鉤爪と牙は血に塗れており、禍々しいオーラを放っている。

「願いを申せ……」

怪物は再び口を開き、ゆつくりと、しかし恫喝するような響きで慎司に迫ってきた。

「な、なななんだよ、こいつ!？」

「え？ 何？ 映画かなんかの撮影？」

不意に現れた巨大な異形の怪物に、慎司と野々香は一樣に恐れおののいた。

しかし同時に奇妙な違和感も覚える。

人がいない。

夕方の公園とはいえ、それなりにいつもは人通りがあるはずなのに、今は人っ子一人目に入らない。

音もしない。

車の音も、さざめく木の葉の音も……。世界が静寂にすっぽりと包まれている。

どうやらこの近辺は結界のようなものの中に取り込まれてしまったらしい。

「ふざけた小僧だな……何の願いもなく、このギルギアス様を喚び出したというわけか……」

ギルギアスと名乗った魔物は目に怪しい光を宿らせ、凶相を浮かべる。

刹那、その体から禍々しい殺気を孕んだオーラが噴き出した。

「ち、違う！ お、俺はあんたを喚び出してなんかない！ なんかの間違いだ！」

状況が判らないまま、しかし生命の危機を感じた慎司がギルギアスに向かって必死に訴える。

「とほげるな。汝は我がギルギアスの召喚紋章を13回この豊穰なる大地に描き、最後は汝が血をもって契約を完了したではないか」

ギルギアスの右の手のひらからぼうつと青白い光が現れた。

やがてそれは円周が不規則に歪んだ円のような模様に変化する。

それがどうやらギルギアスの言うところの召喚紋章らしい。

「そ、そんな紋章、俺は全然見たこともない……」

「待って、慎司」

突然鋭い声で野々香が慎司を制した。

「な、なんだよ?」

「あの紋章の形……あんたが走ってたジョギングコースと一緒だわ」

「はあ?」

「だから地図にあんたが走ってるコースを描き込むとあの紋章の形になるって言ってるの！それであんた今日でこのコース走るの13日目でしょ!」

「……なんでお前がそんなこと知ってたんだよ?」

「べ、別に今はそんなこと問題じゃないでしょ! 13回走ったことが紋章を描いたことになって、さつき転んで怪我して血を出したことが、その契約の完了とやらにつながっちゃったんじゃないかって言ってるの!」

「その通りじゃ、小娘よ……」

ギルギアスは我が意を得たりとばかりに、満足そうに口の端を吊り上げた。

「そんなバカな!」

改めて状況を把握した慎司は、しかしパニくっていた。パニくりまくっていた。

「そんな偶然であるかよ!? ありえないだろ!? そんなんでこんな怪物が来ちゃうのかよ!」

「そんなのあたしだつて知らないわよ!」

「さあ、早く願いを申せ。……願いが無いのなら、今すぐ汝の魂をもらい受ける」

「ええええ!」

無情に迫ってくる怪物は、慎司に淡々と最終通告を突きつける。

「と、とりあえず何か願いを言えば助かるんじゃない!?」

「そんな急に言われても……」

慎司は戸惑った。

「お、俺が願いを言えば、そのまま帰ってくれるんだな!」

「勿論だ。……願いを叶える代価として、汝の魂をいただいてからな」

「どっちにしろ死ぬんじゃないかねえかああー!!」

慎司の絶叫が公園に響く。

「もう待てぬ。さあ、汝の魂をよこせ」

怪物がずんずんと地響きをたてながらこちらに近づいてくる。

慎司は恐怖のあまり足がすくんで全く動けなくなった。

「あぶない!」

「うおっ!」

野々香が慎司を勢いよく突き飛ばした。

そしてその瞬間、慎司を狙って横薙ぎに振るわれた怪物の豪腕が、野々香の体にわずかに接触する。

「きゃああああ!」

それは野々香の体をほんの少し掠めただけだったが、衝撃は大きく、彼女は錐搦みをしながら10mほど離れた街灯に叩きつけられた。

「野々香！」

慎司は必死の形相で野々香の元に駆け寄る。

しかし彼女のダメージは大きいようで、はあはあと荒く呼吸をしながら、苦悶に顔を歪めている。

「慎司……逃げ……て……早く……こほっ……こほっ……」

切れ切れの息の下から慎司に訴えかけていた野々香が、咳と共に吐血した。

この出血……。どうやら口の中を切ったわけではなく、内臓に深刻なダメージを受けているようだ。

「さあ、汝の魂をよこせ……」

「くっ……！」

慎司はぎゅっと目をつぶった。

（どうする？ どうする？ このままじゃ俺も野々香もこの化け物に殺されちゃう……どうする？……どうするー!?）

しばらくの逡巡のあと、慎司は意を決して迫りくる怪物の前に立ちはだかった。

「俺の願いを言う！ こいつを……野々香の命を助けてくれ！」

「ば……か……そんなこと……したら……あなたが死んじゃう……」

「俺の願いはそれだけだ！ 早く叶えろ！」

慎司は歯を食いしばってギルギアスを睨みつける。

「いいだろう」

ギルギアスはニタリと笑うと、両手を合わせて何かを呟いた。

その瞬間、野々香が青白い光に包まれる。するとまるで魔法のように野々香の傷がみるみると癒え始めた。

「だめ、慎司！ お願い！ やめて！」

「いいんだ……これで……」

青白い光の球の中から叫ぶ野々香に、慎司はふっと微笑みを返した。

「さあ、貴様の願いは叶えてやった。汝の魂、貰い受けるぞ」

「ああ、好きにしろ！ 煮るなり焼くなりどうにでもしろ！」

「慎司ー!!」

ギルギアスが慎司に手をかけようとしたその刹那。

「私を喚び出したのはそなたか？」

厳かな声が公園中に響きわたった。

見ると巨大な光球がこちらに向かって、上空からゆっくりと降りてくるのが見えた。

その光はあまりにも眩しく、慎司も野々香もしばらく目を開けることができないほどだった。

「大天使ガブリエル……なぜ貴様が……！」  
 ギルギアスが畏怖の色を浮かべて、諭言のように呟く。

「そなたかな？ 我が召喚紋章を13回描き、最後に処女の血を持って契約を完了したのは……」  
 そんなギルギアスに目を留めることもなく、ガブリエルは静かに野々香の許に光臨する。

そしてその右の手のひらには、黄金に輝く紋章があった。それはやはり、微妙に円周が歪んだ円のような紋章だった。

そう、さきほど見たギルギアスの紋章の外側を、ちょうどつかず離れずの距離で、優しく見守っているような形の……。

「さあ、願いを言いなさい」

「あたしの願いは——」

野々香は言葉を区切ると、すうつと大きく息を吸い込んだ。

「その化け物を跡形もなく消し去ることよ——」

「承知した」

ガブリエルが言い終わらないうちに、その体から発せられた圧倒的な光の奔流がギルギアスを薙ぎ倒し、粉碎し、粉砕し、跡形もなく消滅させた。

「やった——！」

野々香が歓喜の声をあげる。

気がつくのと、大天使ガブリエルはいつの間にかその姿を消していた。

「今の……夢……じゃないよな……」

膝小僧の絆創膏を押さえながら、慎司が放心したように呟いた。

いつも通りの人々の雑踏。

車やバイクの音。

風に揺れる葉擦れの音。

公園には穏やかな日常が戻っていた。

いつの間にか西の空にはもう一番星が輝いている。

「慎司……ありがとうね……さつきはあたしのこと助けてくれて……」

「……お、お前こそ、あんな無茶しやがって……あ、ありがとよ……」

ベンチに並んで座った二人を、しばらく暖かい沈黙が包んだ。

「なあ」

「ん？」

「もうちょっと、さつきのランニングフォーム教えてくれよ。あの感覚、忘れたくないんだ」

「うん、いいよ——」

野々香はにつこりと笑うと、慎司の手をとって、またジョギングコースに戻っていった。今



度は変な物を喚び出さないように、ちゃんとコースを変更して……。

おしまい